

美術の窓(103)

新アクロポリス美術館の建設
—古都に建つ美術館のあり方—

大和文華館館長 水田 徹

10年ぶりにアテネを再訪した。1994～96年実施の美術史海外実地調査「パルテノン・プロジェクト・ジャパン」を後輩たちが引き継いでくれ、今年度その第二段の開始を文部科学省と日本学術振興会が予算措置してくれたからである。

丸10年、アテネはすっかり様変わりしていた。2004年のオリンピックを機に地下鉄が一気に三路線も開通し、一線はパルテノン神殿が建つアクロポリスの丘をかすめ、麓には文字どおり「アクロポリス」駅が開設されている。隣接する二つの市中央広場オモニア、シンタグマにも駅が創られ、その地下通路には、新駅造営に際し緊急発掘された出土品が壁に仕込まれた硝子ケースの中に展示され、あるいは遺構をそっくり強化ガラスで囲い直接観察できるようになっている。

当のアクロポリス駅はホームの壁一面にパルテノン西フリーズの実物大レプリカがはめ込まれ、地上出口の真向かい右手にアクロポリスが聳え立ち、左手で新アクロポリス美術館の建設が最終段階を迎えていた。新美術館の外観と規模、そして丘上のパルテノンに至近距離はほぼ30度の

角度で見上げるロケーション、それは予想をはるかに超え感動的であった。

建築形式、内部構造、展示計画はいずれも考え抜かれたものであり、そこに凝らされた工夫は、遺跡の真上というわけではないが同じく古都の一角を占める我が大和文華館の今後の運営のあり方にも大いに参考になると思われるので、以下その内容をやや詳しく、現場を案内してくれた新美術館建設プロジェクトを総指揮するマンティス・アテネ地区考古局長の話を交え紹介しよう。

まず立地。新美術館は古代アテネの信仰と文化の中心であったアクロポリスの丘の南麓、丘から直線距離にして300米のところに位置し、人々は現場で得た感動と興味を胸にしたまま、新美術館にいざなわれる。

建物の構造は外観は3層、内部は4階建てになっており、さらに地下1階部に古代遺跡をそっくりそのまま抱え込む(図1)。敷地は旧陸海軍病院(現アクロポリス研究所)の背後に広がっていた広大な庭園跡で、全域が古代遺跡であり、先史からアルカイック・古典期、ヘレニズム期、そして最上層には紀元7世紀築の円搭

に到る初期キリスト教時代の邸宅が積み重なる。

当然ながら工事に先立ち入念に発掘され、遺構の大部分はそのまま保存され、一部は新美術館の中央を上下に貫く超大型の中庭式明かり取り(アトリウム)から漏れる自然光に照らされて俯瞰できる。別途、遺構現場にも降りられるようになっており、出土品は新美術館1階に年代順に展示する予定という。

2～3階へはアトリウム沿いに、アクロポリスの西登口に擬した緩やかな大スロープを登る。入館者に再びアクロポリスの現場に立つ思いを抱かせる、まこと心憎い仕掛けである。スロープ両脇には、丘上から出土し旧美術館で人々を魅了してきた、あの古式の微笑をたたえる少女像コレー群を移設し、壁沿いには今は礎石しか残らぬ古アテナ神殿の着彩破風彫刻が復原展示されるという。アトリウムに加え建物外壁をほぼ全面ガラス張りとし、エーゲ海の輝く陽光が隅々まで届くよう考案されているという。

圧巻は最上階のパルテノン室であった(図2)。アトリウムを長方形に囲む壁体の長短辺の長さをパルテノン神殿の内室と同寸法にしてある。神殿内室の外壁を一周していたフリーズ浮彫帯を元の配置のままに再現展示するためである。

そのフリーズ壁を取巻くように、これもオリジナルと同数の柱を林立させ、各柱間にメトープ高浮彫板92枚を配し、さらに東西の短辺には神殿東西破風を飾っていた破風彫刻が並べ

られる。因みにパルテノン室、従って新美術館アトリウムの中心軸は、パルテノンのそれにピッタリ一致させてある。神殿内に置かれていた状態に最大限近い採光効果を作品に与えるためだという。

このように入念に設計され施工されたパルテノン室では、目下作品の搬入作業がたけなわであった。丘上の旧美術館からオリジナル作品を無事に運び込むべく、岩盤むき出しの急斜面を搬送する危険を避け、3基のクレーンで中継しつつ空中移動させる方式が選ばれた(図3、パルテノン室ガラス窓越しにアクロポリスを望む、右手に残り2基のクレーンが立つ)。

残された最大の懸案は、パルテノン彫刻の凡そ3分の2を占める大英博物館所蔵品の扱いである。周知のようにギリシャ政府はその返還を近年とくに強く求めている。19世紀初頭以来、外気から遮断されてきた大英博物館所蔵品と、排気ガスにさらされ続けたアクロポリス所蔵品とでは、大理石の傷みに歴然たる差があるのは認めつつ、今やアテネにも新美術館が用意されたというわけである。

「もちろん私も大英博物館所在のオリジナルをここに一緒に並べたい」と呟きながら、マンティス氏は慎重に言葉を選んで案内をこう締めくくられた。「大英博物館と新美術館のどちらに収まるのがパルテノン彫刻自身にとってより幸せであるか、新美術館完成後にじっくり見較べていただいた上で、世論の公平な判断を待ちたい」。

図1



図2

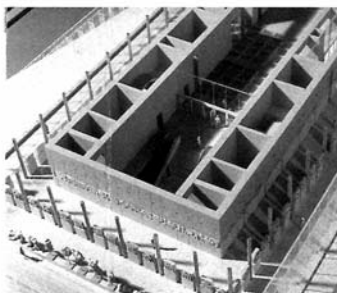


図3



図版出典 図1、2 新アクロポリス美術館建設機構編広報誌、2006年版所載の完成模型図より複写。 図3 筆者撮影、手前の建物は新館竣工後に撤去予定という。

季刊 美のたより No.161

平成20年1月5日

発行 大和文華館